

リメイクされたぜ！
モツピーちゃん！

嘘つき魔神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リメイク前じや変態成分増しましたったモツピーを変えてみた話。

目次

断ち切られる青

第1話：何年かぶりの再会 | 1

第2話：話をしよう | 5

断ち切られる青

第1話：何年かぶりの再会

「……ふふ、空が、綺麗だな……」

「……物騒なもん構えながら言うことか？」

「……はっ、それもそうだな……いつぶりだ」

「……お前が小……4、5のときに越したから……9、10年ぶりか」

互いに懐かしそうに話す男女。これだけ見れば、ラブコメのワンシーンだろうし、諸君もそう想像するだろう。男は刀を両手に、女は大太刀を構えながら、でなければ……

「……いざ！参るっ！」

「参らないでほしいな！」

太刀を構え、一直線に男に向かう女。対する男は刀をX字にし、受け止めようとしている。

「……シャアアッ！」

「……っ！」

ガキインと耳障りな音を立てながら互いの獲物が接触する。力は女の方が強いのか、

徐々に男の体は後ろに下がっている。不味いと思つたか、蹴りを入れようとする。

「……………焦つたな？」

だが、女はそれを軽く受け止め、逆に股間に蹴りを入れる。

「……………あ、あがぁ……………!？」

凄まじい痛みに思わず倒れ、悶える男。それに止めを刺さんと女は太刀を振り上げる。

「……………さようなら」

その一言と共に、勢いよく太刀が振り下ろされる。このままでは、男は死ぬだろう。しかし……………

「……………!」

女は何かに気づき、太刀を振るう。甲高い音を立て落ちたのは……………

「……………出席簿……………!まさか……………!」

「そのまさかだ、篠しのノ之の」

落ちた出席簿を拾いに來たつり目の女。それを射殺さん勢いで睨む太刀の女。股間を押さえ、泡を吹く男。I S 学園始業式の日の出来事であつた。

————— しばらく後 —————

「くそつ、酷い目に遭つた……………」

「酷い目に遭ったのはお前の修行不足だ」

「全く同感だ」

「そりやねえよ……」

太刀と鞘を背中に背負ったポニーテールの少女、篠しのの之の箒ほうき。つり目の黒いスーツの女、織おりむらちちか斑いちか千冬。先ほど股間を蹴られ悶絶していたイケメン、織おりむらちちか斑いちか一夏。一夏が不平を漏らすと、二人に怒られる。

「……はあ、にしても、だ。こんなところで再会とは、世界は存外狭いのか……」

「いや、お前が特殊すぎるだけだろ。私からすれば、どっちもどっちだが」

「私は特殊じゃない」

「充分特殊だ」

さつきからこの調子で会話をしている三人。この三人、実は顔馴染みであり、それと同時にある肩書きがある。が、それは今は置いておこう。

「……箒、さつきから突っ込まなかったけど、それって、ISの待機形態か？」

「ん、よく分かったな。お陰で、手入れが不要なのは助かる」

「……お前の攻撃性の象徴かもな」

「あ？」

「ん？」

「…………喧嘩はやめてくれ」

…………一応この三人、仲はいいはずである！

第2話：話をしよう

織斑一夏はこの世界で唯一の男性IS操縦者である。そのすごさを理解するためにまず、ISというものを理解することから始めなくてはならない。

インフィニット・ストラトス、通称IS。これが開発されるまでの既存兵器を越えた性能を持つ兵器である。また、SE……シールド・エネルギーによる高い防御性能。これらがISを地上最強の兵器たらしめている。しかし、このIS、女性にしか動かせないのだ。これは、制作者である、篠ノ之束しののたばねにも解明できないISの謎であり、世界の世論を女尊男卑に変えた原因でもある。が、そんなことはどうだっていいんだ、重要なことじゃあない。それまで常識だったものを覆した存在、それが織斑一夏である、ということ覚えておけばいい。

篠ノ之、の名を見て、あ（察し）となった人は必ずいるだろう。篠ノ之箒の名字である。篠ノ之束と篠ノ之箒は姉妹である。たったそれだけである。これ以上話すことはありやしない。

——教室に到着——

一方箒、一夏の二人は既に教室に着いていた。千冬は会議があると言い、途中で別れた。二人が扉を開けると、その音に反応し、全員がこちらを向く。

「……満足でみんな」

箒が小さく呟く。一瞬でこのクラス全員の力量を把握し、自分に至るものはいないと当たりをつけた。

「……おおう、まじで女子しかいないのか」

一方、一夏は自分に向けられた視線に恐怖していた。悪意や敵意といったものはなげだが、それでも一斉に見られるのはキツイものがある。そして、改めて同性がいないことを察する。

「……身の振り方考えなきゃな」

両者の呟きは誰にも聞かれず、視線は突き刺さるまま。

「……え、ええつと。織斑くんと篠ノ之さんは何で立ってるんですか?」

ふと後ろから声が聞こえる。そちらを見ると、緑髪の童顔の恐らく教師がいた。

「あ、ああすみません。道に迷ってて……」

一夏はそう言いながら席に向かう。箒もそれに続く。

「そうなんですか、ここ広いですからね……」

どうやら、教師は納得してくれたらしい。お陰で、二人は安心して席についた。箒が心配していたかは知らないが。

「ええ、それでは皆さん、入学おめでとうございませす！この1年1組で副担任を勤める、やまだまや山田真耶です。これからよろしくお願いします」

簡潔だが分かりやすい自己紹介、これに拍手を送らないものはいなかった。入学式後の出来事である。